

サステイナブル縄文展 ガイド2



サステイナブル
縄文展 2019
SUSTAINABLE JOMON

1万年以上続いたとされる縄文時代。これほど長期で1つの時代が続いた歴史は世界に例がなく近年、世界からの注目度が増えています。現代社会が求めている自然とのバランスや、社会のヒントは縄文時代にあるのかも知れません。本展においては、土器・土偶の展示を通して、縄文という時代に想いを巡らせ、地続きとしての“縄文時代”を感じ得る一つの機会にできればと考えています。

サステイナブル (sustainable) とは？

持続可能であること、とくに環境破壊をせずに維持、継続できるという意味の英語。1987年に国連「環境と開発に関する世界委員会 (WCED: World Commission on Environment and Development)」が公表した報告書「われら共有の未来 Our Common Future」の中心的な考え方として、持続可能な開発 sustainable development という概念が提唱された。これが世界から広く支持されたため、一般的な環境用語として使われるようになった。一般には、

- ・サステイナブルエコノミー sustainable economy (環境保全に配慮した持続可能な経済)
- ・サステイナブルシティ sustainable city (環境への影響に配慮した都市づくり)
- ・サステイナブルモビリティ sustainable mobility (環境にやさしい車社会)

などというように、環境や資源に配慮したという意味をつけ加える単語として使われている。

将来のための地球環境の保全、未来の子孫の利益を損なわないことを前提にした社会発展、などといった視点が、従来の環境問題への取り組みと比べて斬新なことから、さまざまな分野に広がっている。

[コトバンクより引用]

縄文の持続性

縄文時代とは、約1万5000年前から約2300年前にかけての時代で、狩猟採集社会といわれています。そのため、縄文人はいつも食べ物を求め、不安定な生活を営んでいたイメージをもちますが、最近の研究では同じ遺跡に、1000年から1400年もの間、人が住み続けたことがわかってきました。それに比べて、縄文時代の後の、水田耕作を特徴とする弥生時代の遺跡は、せいぜい数百年しか続いていません。なぜ、狩猟採集社会の縄文人の方が、同じ場所に長期間居住し続けることができたのか。

このテーマを解く手がかりは、縄文人たちの食料にありました。最近の研究では、彼らは動物、魚、貝、ドングリなどをバランス良く食べていて、その中でもドングリなど植物が主食だったことがわかってきました。ドングリは殻を割り、土器で煮てアクを抜き、団子のような塊にして食べたり貯蔵していたりしていたこともわかってきました。多様な文様や形の縄文土器はそれらの加工具だったのです。狩猟よりも、森の資源に強く依存し、それを加工や貯蔵する食文化を作りあげたことが、長期的な社会を形成するひとつの基盤になっていたことがわかってきたのです。

人骨を調べると、内陸地域の人も沿岸の地域の人も、森の資源である動物やドングリなどの植物、海の資源である魚や貝をバランス良く食べている人が多いこともわかっています。また、海から何キロも離れている遺跡から海の貝殻が大量に出てくるというケースもあります。こうした事実から縄文人は、それぞれの集落の役割を地域で上手く使いこなし、人の交流や物の流通を頻繁に行っていたことが、特定の集落に人口の一局集中による資源の枯渇防止にもつながり、それが長期的な社会を構築する基盤になっていたと考えられるのです。この縄文社会の構造は、現代社会が目指そうとしている持続可能性社会を構築するヒントになります。また、縄文人たちの地域間の相互関係は、私たちが生きる社会の基盤にある貨幣経済の根幹となる等価交換のような仕組みでは説明できません。

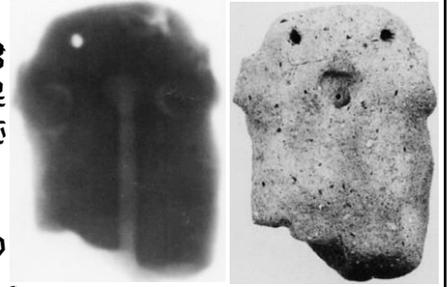
縄文時代は、特定の産地の物資が、真綿に水が染みこむように、流通しているのです。信頼や親ぼくが社会を支える仕組みであったのかもしれませんが。それは貨幣経済に内在する今日的な課題を抱えて生きる私たち現代人にとって、決して原始的で野蛮な制度であったと評価することもできないでしょう。

[meiji.netより抜粋引用]

西の縄文ど～も君??

平成2年に大阪の更良岡山遺跡から発掘された土偶は大湯の縄文ど～も君にそっくりですが、数字を表す紋様はありません。でも、口からお尻（足側）に貫通穴が開いています。複製品を吹いてみると、非常に高音の一応音らしきものは鳴るようです…。人間には聞こえませんが、犬の聴覚は50kHzまでと言われていいますので、犬だったら聞こえるかも。もししたら、犬笛だったかも知れません。それにしても、目のように見える2つの穴は奈良県の土偶のように貫通しており、この穴は耳なのかも知れません。

〔縄紋文化研究会〕



縄文なんじゃこりゃ ～その1：壺？笛？～

秋田県伊勢堂岱遺跡から出土の「壺」と称する土器（→）ですが、形は壺でも何か変な感じです。土器の側面には紐を通す穴があり、紐を通して首からぶら下げて使っていた？口の部分は破損しており、おまけに、祭祀用と記載されています。いったい何に使用したのか、これでは全く訳がわからないので、複製してみました。複製品の口に下唇の下側を当てて強く息を吹くと…誰でも音が鳴らせる土笛になりました。祭祀用ということから、お祭りに使用した後に、口を壊して御霊送りの儀式を行い埋葬したのでしょうか？古墳時代の銅鐸も舌を抜いて音が鳴らない状態で埋葬されていますが、モノの持つ主機能を封じることによって復活しないように封印し、別世界へ御霊をお送りしていたのではないかと想像してしまいます。

〔縄紋文化研究会〕



縄文なんじゃこりゃ ～その2：この紋様は！？～

宮城県大田町貝塚出土の大田式土器に円筒形の土器があります。円筒土器といたら北東北～道南の土器じゃないか！と思いますが、大田式発祥の貝塚から出土したこの円筒形土器も何か変です。↑の土器と同じように側面には紐を通す穴があります。おまけに、胴体に1cmくらいの穴まで開いています。…ということで、この土器も複製してみました。形ができあがり、隆帯紋に着色してみると…顔！（→）しかも、腕らしきものもあり、土器の胴体の穴はまるで地面に突いている杖のもち手の部分に開いている？ここまで想像すると以降、杖を突いた長老にしか見えなくなりました。この土器も最初は笛かと思ったのですが、複製品を吹いてみても音が鳴らないことから、以下の用途を想像中です。

- ①太鼓：口縁に皮を張り紐で固定する。叩くと杖の穴から音が出る
 - ②集音器：杖の穴に耳を当てて、口縁を向けた方向の音を聞く
 - ③提灯：中に火を入れ提灯のように使う。杖の穴と口縁から光線が出る
- 果たして、実際の使用方法は…？

〔縄紋文化研究会〕



宮城県初？北小松遺跡の亀形土製品

宮城県大崎市田尻の北小松遺跡から出土した亀形土製品は青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要vol.21収録の論文「亀形土偶（上）—乳房をもつ亀は存在するのか—」によると宮城県初の亀形土製品のようです。この論文では亀形土製品は土偶の一種であって、笛ではないと主張されておりましたが、複製品は良い音で鳴ります。しかも3穴あるので、上手く吹くと3音（吹く穴を変えると6音）まで出せます。同遺跡では犬の埋葬墓も出土しており、犬笛として犬を操っていたのかも知れません。熊と戦って犬が死んでしまったので、一緒に埋葬したとか？想像してしまいます。

〔縄紋文化研究会〕

